

*** 今日の健康（7月） ***

< 伝染性膿痂疹（とびひ） >

とびひは、高温多湿になる初夏から夏にかけて幼児に多く、原因菌の大多数は黄色ブドウ球菌（黄色ブ菌）で、A群β溶血性連鎖球菌（溶連菌）によっても発症する皮膚の感染症です。伝染性が強く、プールあるいは一緒に遊んだり生活環境を共にしたりする子供達の間で伝染します。「かゆいかゆい」とかきこわすと、まるで「飛び火」のように全身に広がったりすることから"とびひ"とよばれています。暖房や温水プールの普及により冬でも見られます。黄色ブ菌による水疱やびらんを特徴とする水疱性膿痂疹と、溶連菌による厚い痂皮を特徴とする痂皮性膿痂疹に大別されます。

< 黄色ブ菌による水疱性膿痂疹 >

膿痂疹のほとんどが黄色ブ菌を原因菌とする水疱性のもので、表皮剥脱毒素を有する黄色ブ菌の皮膚の角下層への直接感染により、浅い透明な水疱が形成されます。水疱は容易に破れてびらんとなり、水疱内に存在する多数の黄色ブ菌が近隣および遠隔部位に"とびひ"して次々に伝染します。個々の病巣は10日前後で乾燥し治癒しながら次々に伝染するので、新旧の皮疹が混在します。表皮剥離毒素が血流を介して全身に達するとブドウ球菌性熱傷様皮膚症候群(ssss)となり、広範な熱傷様の表皮剥離を起こし、重症で入院加療が余儀なくされます。最近ではメチシリン耐性黄色ブドウ球菌(MRSA)による伝染性膿痂疹もみられるので注意が必要です。

< 溶連菌による痂皮性伝染性膿痂疹 >

少数例ですがA群β溶血性連鎖球菌（溶連菌）を原因菌とする膿痂疹もあり、小児に限らず、四季を通じて発症します。はじめは小さい水疱ですが、次第に大きくなり、膿疱化し周囲は強い発赤を伴います。膿疱は破れてびらん化し、厚く堆積する痂皮に被われます。皮疹は一気に多発する傾向があり、顔面や露出部に多く、疼痛、発熱など全身症状を伴うこともあり、溶連菌の性質から腎炎を合併することもあります。アトピー性皮膚炎に合併することが多いです。



< 予防と対策 >

日頃から石鹸で手荒いし、つめを短く切ることが、最も有益な予防方法です。また、皮膚湿疹、虫さされ、アトピー性皮膚炎などの皮膚の弱い所に感染することが多いので、これらは早めに治療しておきましょう。

とびひになったら、直ぐに小児科か皮膚科を受診しましょう。抗生物質の入った軟膏や広範囲の場合は内服が効果的です。

全身に広げないように清潔にしましょう。毎日シャワー入浴しゴシゴシこすらず石鹸をよく泡立てて手でやさしく洗ってシャワーで十分流し、湯ぶねにはつかからないようにしましょう。水疱をかきこわさないようにしましょう。完全に治るまでプールは禁止です。

洋服や下着、入浴時に使用したタオルなどは家人のとは別に洗濯し日光消毒して下さい。

幼稚園や保育園、学校などの集団生活をさせる場合は、患部をガーゼで覆い、子供が直接ふれないようにしましょう。とびひの範囲が広いときは休ませましょう。